

合 同

No. 508

「散らされた者として世界を変えていく」

日本キリスト合同教会教師

品川 謙一



「主は彼らをそこから全地に散らされたので、彼らはこの町の建設をやめた。こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱（バラル）させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである」（創世記 11 章 8～9 節）。

「ステファノの事件をきっかけにして起こった迫害のために散らされた人々は、フェニキア、キプロス、アンティオキアまで行ったが、ユダヤ人以外のだれにも御言葉を語らなかった。しかし、彼らの中にキプロス島やキレネから来た者がいて、アンティオキアへ行き、ギリシア語を話す人々にも語りかけ、主イエスについて福音を告げ知らせた。主がこの人々を助けられたので、信じて主に立ち帰った者の数は多かった」（使徒言行録 11 章 19～21 節）。

大学院の課題として、生成 AI を使って短編小説を書く経験をしました。面白かったのは、約 70 人のクラスで、それぞれバラバラに AI に書かせたものを提出したのですが、筋書きだけでなく、個々の場面の表現や主人公の名前まで、かなり共通したパターンが見られたことです。これは、AI モデルがある程度共通の学習をしていたため、同じようなパターンで出力された結果だと思われます。現在の AI で主流の LLM（大規模言語モデル）は指示していない部分をノリで埋めてくる性質もっているので、AI と共創するには、自分の感性とアイディアで修正させていくエネルギーが必要で、これからの時代に人間に求められるのは面白さや美を判断する感性であり、それがあってこそ AI と意見を戦わせながら創作することができるのだと思われました。

バベルの塔から散らされ、それぞれ独自の言語をもつようになった人間は、その多様性の中で様々な創作をしてきました。散らされた原因は人間の傲慢

さに対する神の介入だったわけですが、結果として多くのクリエイティブな作品を生み出してきたのは究極のクリエイターである神から与えられた創造性のゆえだと思います。AI によって世界の多様性が失われていく時代の中では、散らされた者としてのアイデンティティをもち、ChatGPT や Claude などの巨大プラットフォーム上で動くフロンティアモデルではなくオープンソースで透明性のある LLM モデルをローカル環境で動かすことや、AI モデルの性質を理解しながら、自らの感性の声と呼応しつつ共創していく心意気が重要になると考えています。

自分たちが散らされた者であるという認識はわたしたちの信仰生活も変えていくはずです。ステファノの事件で散らされた人々がアンティオキアでユダヤ人以外に福音を告げ知らせたのも、当時のユダヤ社会における同調圧力に抗った行動でした。それはユダヤ人偏重になっていた歪んだ信仰コミュニティに神の国の多様性を回復する重要なステップであり、これが突破口となって異邦人宣教が拡大し、現在のように世界中に福音が届けられることにつながりました。

そういう意味では、現在の日本のクリスチャンコミュニティはもっと「散らされる」必要があります。人口の 99% が教会コミュニティの外に生きている社会ですから、わたしたちクリスチャンの生きざまを教会コミュニティの外（散らされた場所）で積極的に表していきたいと思うのです。

ここでも散らされた者としてのアイデンティティが重要です。教会コミュニティと日本社会両方の同調圧力に抗い、神から与えられている多様な創造性を発揮して、社会の理不尽さや生きにくさに風穴を開けることができれば、それが人々にとっての福音となることでしょう。例えば、不登校の子どもたちのサポート、外国人の隣人たちとの共生、災害時の支え合いの仕組みなどの社会課題に取り組んだり、あるいは身近な友人や職場の同僚の相談にのったり一緒に祈ったりすることも福音の種になるでしょう。世界は散らされた者として生きる人々を必要としています。